

専門ミュージアム

—大学の知と文化の発信拠点—

大学におけるミュージアムは、学術研究や教育活動の中で蓄積された資料を保管・公開する場であるとともに、大学が有する知的資産を広く社会に発信する役割も担っている。なかでも、特定の学問領域に特化したミュージアムは、専門性に根ざした展示や企画を展開し、学術的な価値に加えて、教育的・文化的な意義を併せ持つ場として注目を集めている。こうした専門性は、大学固有の歴史や強みに支えられており、その大学の個性や魅力をかたちづくる要素ともなっている。

近年では、展示手法の工夫や体験型プログラムの導入に加え、教育課程との連動、地域との協働など、活動の幅はより多様で開かれたものとなってきた。また、学生

CONTENTS

京都国際マンガミュージアムの20年

—京都精華大学の取り組み—

勝島 啓介

京都精華大学 京都国際マンガミュージアム事務局長

都会で感じる海と人のつながり

茂木 正人

東京海洋大学 海洋環境科学部門教授・
マリンサイエンスミュージアム館長



University Museum

が展示企画やガイドに関わる事例も増え、学びのフィールドとしての可能性も広がっている。

本特集では、こうした大学ミュージアムの取り組みに焦点を当て、専門性を軸とした理念や運営の工夫、教育・社会との関係性などを紹介する。展示や来館者との交流を通じて見えてくる、大学と社会の新たな接点にも注目したい。

芸術の秋に刊行する本号を通じて、大学から生まれる知と文化のかたちをあらためて紹介し、大学ミュージアムが持つ潜在的な力と今後の可能性を展望する機会としたい。



時をこえて響く音

―活用と保全の調和を目指した知の発信―

不動 真優

国立音楽大学楽器学資料館主任学芸員・課長補佐

都心で見学できる化石の水族館

宮田 真也

学校法人城西大学

水田記念博物館大石化石ギャラリー学芸員・理学部助教

創立100周年を迎える演劇博物館の活動

児玉 竜一

早稲田大学文学部教授・演劇博物館長

小さくてもきらりと光るミュージアム

―学習院の歴史と知の集積を未来に伝える―

長佐古 美奈子

霞会館記念学習院ミュージアム、学習院大学史料館学芸員

京都国際マンガミュージアムの

20年

—京都精華大学の取り組み—

勝島 啓介

京都精華大学

京都国際マンガミュージアム事務局長

1—大学ミュージアムの設立背景と運営理念

「京都国際マンガミュージアム」は、京都精華大学と京都市との共同事業として、2006年11月25日に開館した本学の学外施設で、2026年度には開館20周年を迎える。

設立の背景として、本学が1973年に美術科にマンガクラスを設置したのち、2000年に芸術学部マンガ学科へと昇格、開館する2006年にはマンガ学部を設置していた。マンガ研究のための国内外に向けた拠点をつ

くる必要性から、2003年に当館の構想は生まれ、具体的な場所として挙がったのが元龍池小学校の校舎だった「写真1」。

京都市と本学と地域との三者間協議を重ね、2004年9月に合意、翌2005年10月に公表されたが、地域の方の不安はすぐには解消されなかった。故河合隼雄文化庁長官を招いたフォーラムを開くなど、説明を続けた結果、「伝統を守りつつ、新たな文化を創造し続けた京都だからこそ、世界から注目をされる日本のマンガ文化の拠点にふさわしいのではないか」と、地元の皆様からの賛同と協力を得ることができた。

JR京都駅から市街地方面に地下鉄で約5分という交通の至便があり、2024年度の年間来館者数は、コロ



〔写真1〕外観

ナ禍前の2019年度とほぼ同じ約27万人に回復した。国際観光都市としての京都の知名度による波及効果もあるが、近年では観光地として当館を目的に来日する外国人も着実に増えている。累計来館者数は、2023年に400万人を突破。国内外からの視察や取材も年間約300件をキープする。

2 資料の収集・保管・活用に関する工夫

当館の所蔵資料は大半が寄贈によるものである。開館当初からたくさんの寄贈のご協力をいただいたおかげで、開館10年を待たずに所蔵数は30万点（開館時は20万点）を超え、容量の限界が見えてきた。そのため、現在資料の寄贈は原則受け付けていない。とはいえ、資料の増加が全くストップしているわけではない。企画展をメインに、館内で開催される展示の関連資料や定期的に組まれる特集棚の資料などには、新規購入分もある。その他、当館に設置されている事業推進室が企業や自治体などから受注し、制作している「実用マンガ」もストックしている。その内容は社史や創業者の伝記、医療現場の補助資料な

ど多岐にわたる。一般的な出版物の流通ルートに乗らない資料が収集できるのは、館内で制作している強みの一つであろう。

当館の主な収蔵スペースは、「マンガの壁」と呼ばれる開架と、建物地下にある収蔵庫（＝閉架）である。所蔵資料約30万

点のうち「マンガの壁」

には約5万冊が収められている。収蔵庫は2カ所あり、1つは主に1950年以降の雑誌と単行本による北館収蔵庫、もう1つは明治時代以降の風刺画雑誌や一般書籍の流通とは異なった赤本や貸本、各国で出版された海外マンガなどによる本館収蔵庫がある「写真2」。

「マンガの壁」の資料は、来館者が自由に手に取って読むことができる。「自分で」元の場所に戻すことを暗黙のルールとして、敷地内であればどこにでも持って行ける（トイレなど一部を除く）。人工芝が敷いてあるグラウン



[写真2] マンガの壁

ドで寝ころがってマンガを読む風景は、当館のアイコンのひとつとも言える。資料の持ち運びが自由な分、紛失や盗難を心配する声もある。だが、動きの多い開架資料は年1回の蔵書点検を行っているが、ここ数年の紛失率は0.1%を下回るほど低い（2024年度実施時は紛失率0.02%だった）。一方、開架資料を利用する際は、研究閲覧室を設けており、事前の登録と予約により、その資料を閲覧することができる。

資料の活用という意味では、「何を読もうか？」と迷う方にナビゲーションとなる特集棚をいくつか設けてマンガを紹介・提案している。こちらからアプローチすることで、偏りがちな開架資料の利用を分散させたいという意図もある。このコーナーは「えむナビ」と呼ばれ、館内3カ所で展開している。1つ目の棚では、主に企画展と連動した特集を組んでいる。企画展で取り上げた作家の作品を集めたものから、グルメマンガ、化け猫マンガ、子育てマンガ、アフリカが舞台のマンガなど、これまでさまざまな切り口でテーマを設けてきた。2つ目の棚では、前年に邦訳出版された海外マンガ（IIガイマン）を、3つ目の棚では、前年にマンガの賞に入賞またはラン

キングに入った作品（IIベストマンガ）を紹介している。「ガイマン」と「ベストマンガ」は年1回更新されるため、話題性の高い作品が並ぶ。

館内で開催される企画展では、所蔵資料が展示品として公開されるほか、企画展関連資料を手に取って読めることもある。

3—展示企画の特徴や反響の大きかった事例

当館では年3回の企画展を柱にさまざまな展示を開催しており、所属の学芸室職員や、運営母体である京都精華大学国際マンガ研究センターに所属する教員が順番に担当している。

ラインアップのコンセプトは、研究者による学術的な切り口や、国際的な視点を意識したもの、毎年開催しているKYOTO CMEEX主催による京都国際マンガ・アニメフェアとの同時開催によるものに分かれる。

一例を挙げると、2024年秋から2025年春にかけて開催した企画展「のこす！いかす!!マンガ・アニメ・ゲーム展」は、文化庁「メディア芸術連携基盤等整備推進



「写真3」の「のこす!いかす!!マンガ・アニメ・ゲーム展」フライヤー

事業成果発表展」という位置づけで、2010年より文化庁が実施してきたメディア芸術のアーカイブ（収集・保存・活用）事業がどのような取り組みなのか、マンガ・アニメ・ゲーム分野それぞれに紹介した展示である「写真3」。マンガ分野ではもちろん「マンガ資料」を展示しているが、それは出版された作品の原画や本・雑誌だけではなく。作家自身が参考資料として作ったスクラップブックや、取材時に撮影した写真、または、印刷に使われていた垂鉛版、幼少期のマンガ作品など、作品が生まれ、読者に受容され、次の作り手・作品につながると

いう、一連の過程で生まれるあらゆるものが「マンガ資料」として考え得るということを実感できる。このような中間生成物についても、「いったいどこまで、誰が、どう収集し、保管し、活用していくのか」を考えるきっかけとなることを企図した展示であるが、当館でもさまざまな場面で同じような問いに向き合い、日々試行錯誤している。

4—教育・研究との連動

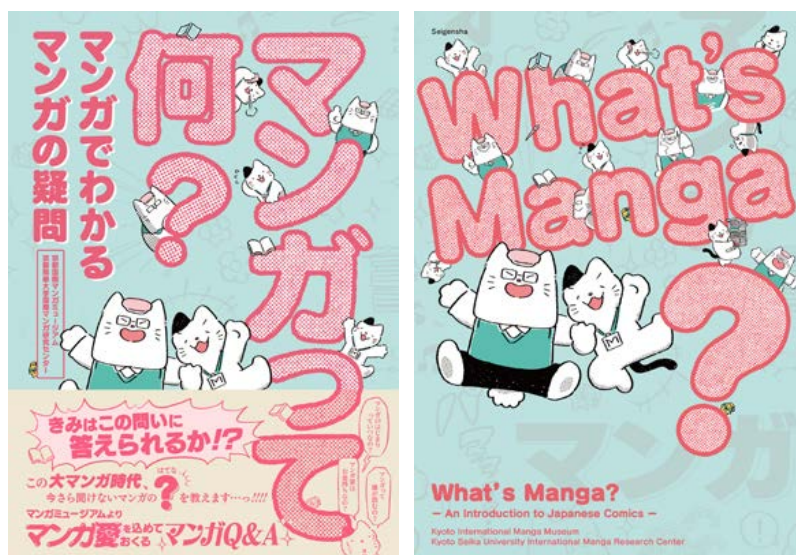
2006年に日本初のマンガ学部を、2010年には日本初のマンガ研究科を開設した、運営母体の本学ではマンガを単なる資料として扱うのではなく、その表現やメディアとしての本質を明らかにしていくことで「マンガとは何か」を追究してきた。さらに本学の研究機関「国際マンガ研究センター」との連携により、教育活動とともに幅広い研究成果をミュージアムでも発表してきた。

このような活動成果をまとめた館の公式ガイドブック「マンガって何？マンガがわかるマンガの疑問」の日本語版を2024年に、英語版を2025年に刊行した「写真4」。

日本語版のあとに出版した英語版の売れ行きが実に好調であることから、海外からのマンガに対する注目度の高さが感じられる。

教育の現場としては、博物館学芸員や図書館司書の資格取得のための実習生

をはじめ、大学コンソーシアム京都の産学連携教育プログラムを積極的に受け入れるなど、後進の育成に取り組んでいる。また、学生に限らず、マンガ資料の保存および活用は、まだまだ手探りの状況であることから、他のマンガ関連施設から依頼があれば、独自で研修プログラムを設け、相互の施設の情報交換など、マンガ資料を取り扱う職員の教育



[写真4] 青幻舎「マンガって何?」左:日本語版、右:英語版

活動にも微力ながら取り組んでいる「表1」。

5—社会貢献・地域連携・市民との協働プログラム

当館は先に触れたように元龍池小学校の校舎を活用し、当時の佇まいを残している。それは長年地域のシンボルであった小学校の役割を引き継ぐという意味であり、地元との連携が極めて重要と考えるからである。館内に設けている龍池歴史記念室では1869年に開校した日本における最初の学区制小学校（番組小学校）の記録と記憶を常設で展示している。少子化の影響による1995年の閉校後も、龍池自治連合会が当館と共存共栄する形で、地域の集会所（通称T'sサロン）や会議室を設け、閉館後のグラウンドや体育館では、これまでどおり地域の活動が続けられている。また、災害時には龍池学区の避難所として開放される。

自治連合会の具体的な活動として、所属する各団体の月例会議をはじめ、なぎなた、卓球、太極拳、ゲートボールなどの体育会系の活動、「ふれあい」、「制作」、「さわやか健康」、「キッズパーク」、「歌声」などのサロンが開催

会期・実施日	過去3年に実施した主な企画展・イベント・シンポジウム・ワークショップなど
2023年3月18日～5月28日	ワークショップ・企画展/あつまれ！マンガワークショップ博
2023年4月30日	イベント/京都北山吹奏楽団演奏会～北山MMコンサート27～
2023年5月28日、29日	国際学術会議/メカデミア（Mechademia）
2023年6月17日～10月3日	企画展/デビュー50周年記念 村上もとか展「JIN-仁-」、「龍-RON-」、僕は時代と人を描いてきた。
2023年8月8日	ワークショップ/夏休みオンラインマンガ教室マンガの“ネーム”を描いてみよう！
2023年8月12日～2024年7月19日	企画展/第11回「大マンガラクタ館」こどものぜいたく、別冊付録だーい！
2023年8月20日	トークイベント・ワークショップ/荒俣宏館長の「こども妖怪教室」
2023年10月26日～2024年2月18日	企画展/「アフリカマンガ展」
2023年10月29日	イベント/京都北山吹奏楽団演奏会～北山MMコンサート28～
2023年11月26日	イベント/荒俣宏館長&京都精華大学 堤邦彦教授と巡る 京都妖怪ツアー ～鬼の反乱と蛇の執念～
2023年12月9日	イベント/マンガカフェ シーズン2 第2回「2023年のマンガ界を振り返るぞ！」
2024年2月11日	トークイベント/荒俣宏館長の節分おぼけ☆仮装百鬼夜行
2024年2月27日・3月5日	イベント/2024えむえむ建築ツアー
2024年3月14日～6月25日	企画展/What an OHINATAful World～この素晴らしいきおひなたごうの世界～
2024年3月23日	ワークショップ/春休みオンラインマンガ教室/マンガの“ネーム”を描いてみよう！（第2回）
2024年5月5日	イベント/京都北山吹奏楽団演奏会～北山MMコンサート29～
2024年6月15日	イベント/荒俣宏館長イベント「栗塚旭出演・最新映画作品を観て語る会～小泉八雲の故地をめぐる、ちょっと「怪談（くわいだん）」な話～
2024年6月23日	イベント/第23回日本マンガ学会大会 シンポジウム「マンガと〈展示〉」
2024年7月13日～10月8日	企画展/九井諒子展 & 「ダンジョン飯」迷宮探索展
2024年7月20日～現在	企画展/第12回「大マンガラクタ館」「終戦直後の子どもマンガ」特集/すきっ腹もマンガをよんで満腹、元氣も勇氣も出た！
2024年7月27日、28日	ワークショップ/京都国際マンガミュージアム×KAM（カム） 能美市九谷焼美術館「人気キャラクターの九谷焼絵付け体験」
2024年8月11日	イベント/荒俣宏館長の「こども妖怪教室」2024
2024年9月21日	イベント/コスプレパフォーマンスステージ「コスミート102」
2024年9月21日、22日	イベント/アニメ映画上映イベント「KYO-MAF“Anime Cinema Night”」
2024年9月29日	イベント/京都北山吹奏楽団演奏会～北山MMコンサート30～
2024年10月1日～現在	企画展/オンライン展覧会 マンガ・パンデミックWeb展 2024
2024年11月17日	イベント/ルノー・ルメール トークショー/マンガを受け継ぐ：マンガからMangaへ、そしてMangaからマンガへ
2024年11月23日～2025年4月15日	企画展/文化庁メディア芸術連携基盤等整備推進事業成果発表展 「のこす！いかす！！マンガ・アニメ・ゲーム展」
2024年11月30日、12月1日	イベント/マンガ出張編集部@京まふ
2024年12月21日	イベント/マンガカフェ シーズン2・第3回「2024年のマンガ界を振り返るぞ！」
2025年1月12日	イベント/トークイベント「グラフィックノベルにこめたメッセージ」
2025年3月1日	イベント/第10回 日文研－京都アカデミックブリッジ 「岩倉使節団150年：マンガで考える日本の近代」
2025年4月13日	イベント/対談イベント「ちばてつや×養老孟司ミュージアム発・マンガの未来へ」
2025年4月26日～7月1日	企画展/マンガとボードゲーム展
2025年5月4日	イベント/京都北山吹奏楽団演奏会～北山MMコンサート31～
2025年5月24日～6月24日	企画展/台湾の少年と日本の少年～巡り合うマンガ文化の百年
2025年6月7日、8日	国際学術会議/メカデミア（Mechademia）
2025年7月3日～8月17日	企画展/「マンガで考える人権問題：マンガ家が語る10のストーリー」展
2025年7月12日～11月25日	企画展/「琉球新報ギャラリー」（沖縄）～「京都国際マンガミュージアム」（京都）巡回展 マンガと戦争展2
2025年7月13日	イベント/シンポジウム「村上知彦のいない日々のために」
2025年7月26日～8月24日	ワークショップ/オリジナル缶バッジを作ろう！
2025年8月2日、3日	ワークショップ/京都国際マンガミュージアム×KAM（カム） 能美市九谷焼美術館「人気キャラクターの九谷焼絵付け体験」
2025年8月9日	イベント・企画展/終戦80周年記念トークイベント&ミニ原画展 夏とモノクローム ～日本映画黄金期の女性映画人～

[表1]過去3年の主な企画展・イベント・シンポジウム・ワークショップリスト

されており、ミュージアムの来場者は烏丸通から、地域の関係者は反対側の両替町通から入館されることになっている。当館はそれぞれの活動や目的に応じて施設を管理する調整役を担っている。

毎年恒例の催事として、8月のたつつけ夏祭りでは、近隣の学校有志によるバンド演奏、祇園祭山鉾のひとつ鷹山の祭り囃子などが演奏され、当館専属スタッフによる似顔絵サービスの提供や、館内に常設小屋があるヤッ

サン一座による紙芝居も祭りを一緒に盛り上げる「写真5」。ほかにも、10月の体育祭では、当館も町内会のひとつ「えむえむ町」（「えむえむ」は、マンガとミュージアムそれぞれの頭文字Mからとった通称である）として参加し、綱引きやリレーなど出場できる競技に



〔写真5〕たつつけ夏祭り

は当館スタッフが積極的に参加し、最後に行われる抽選会も含め、参加された町内の方々との親睦を兼ねた慰労会が開かれる。

新しい取り組み例として、地元の少年補導委員会との協働による、子どもたちを対象としたワークショップがあり、「地元からマンガ家がデビューしたら良いな」をテーマに「第1回たつつけマンガ道場」を始動させた。

6 国際を冠する施設として

結びに、館名の冠にもある「国際」的な活動について紹介したい。2024年度の来場者のうち約8万人が海外の方で、開館以来はじめて入場者全体の3割を超えた。国・地域数は100カ国を超え、トップ3は、アメリカ（約1万4953人）、中国（約1万4004人）、フランス（約1万3183人）で、いみじくもそれぞれ、アメリカン・コミックス、連環画、バンド・デシネと、日本のマンガとの影響関係を持つ国が並んでいる。受付スタッフが「どこの国から来たのか」を来場者から丁寧に集計したところ、明らかに変わった結果である。

館内表記については、現在は日本語と英語のみに絞っているが、これは解説パネルが増えることで逆に分かりにくくなるのを避ける意図がある。最近はスマートフォンをかざせば、多言語に翻訳してくれるアプリが充実してきたことも大きい。

2025年の国際的な企画として、大阪・関西万博の国連パビリオンにおいて、国連人権高等弁務官事務所との共催で人権をテーマにした展覧会を開催した。ジェンダーや思想と表現の自由など、人権にまつわる10のトピックスをテーマに、10人のマンガ家が描き下ろした作品を展示したが、好評につき当館でも巡回展を開催した。また、同じ万博のイタリア館にて、来日したイタリアのフリウリ・ヴェネツィア・ジュリア州にあるポルデノーネ漫画館と当館との間で、相互協力に関する意向表明書の調印を取り交わした。

今年は他にも、企画展「台湾の少年と日本の少年」巡回合うマンガ文化の百年」を開催した。本展では台湾と日本がたどってきた近現代史を追いながら、時代的、政治的な要因がマンガ文化に与えた影響と、それに抗い表現を切り開いてきたマンガ家・編集者たちを紹介した。開

幕式では台湾から伝統的な人形劇である「布袋劇」の劇団を招くなど、この展覧会の文化的背景を深めるイベントも実施した。なお同展は、台中にある國家漫畫博物館に巡回されることが決定している。

はじめに触れたように、当館は2026年度で20周年を迎えるが、近年では、マンガを取り扱う施設、あるいはこれから計画をしている国や地域から、さまざまな形で協力や連携に関する依頼が増えている。この間の活動を通じて、当館ならびに本学の存在や理念が少しずつ認知されてきたことを大変光栄に感じる。しかし、もちろん現在でも「マンガとは何か」という問いかけは、試行錯誤の中にあり日々実験を続けている。今後も京都から「マンガって何？」を探究しながら、社会や世界ともつながる大学の専門ミュージアムでありたいと願う。

〈参考文献〉

吉村和真（京都精華大学）「学外施設『京都国際マンガミュージアム』による社会連携・社会貢献」「大学評価研究」第16合抜刷（公益社団法人大学基準協会総務部、2017年10月発行）
大谷景子（京都国際マンガミュージアム学芸室）「マンガ資料の収集・保管・公開」とはどういうことか？」「専門図書館No.321」（専門図書館協議会、2025年6月発行）

都会で感じる

海と人のつながり

茂木 正人

東京海洋大学海洋環境科学部門教授・
マリンサイエンスミュージアム館長

1 海の標本が語るキャンパスミュージアム

東京海洋大学マリンサイエンスミュージアムは、本館、隣接する鯨ギャラリー、そして練習船「雲鷹丸」うんようまるから構成されている。鯨ギャラリーには、巨大なセミクジラとコククジラの全身骨格が展示されている。雲鷹丸は明治時代に建造された3本マストの練習船で、現在は品川キャンパス内で陸上保存されており、登録有形文化財に指定されている。

本館は2階建てで、1階の大部分は標本収蔵庫となり、魚類標本など数万点が保管されている。1階ホール部分と2階は展示室として利用されており、魚類や海鳥類の

はく製、貝類や甲殻類の標本、鯨類骨格標本、歴代練習船の模型、漁網、養殖に関する展示、水産食品など、海洋・水産に関わる多様なコレクションが並ぶ。

コレクションは東京水産大学（東京海洋大学の前身）の研究教育の歴史をそのまま反映しているといっていだろ
う。大げさかもしれないが、それは日本の水産史でもある。雲鷹丸は建造当時、漁業開発や水産研究教育を担っており、船上でのカニ缶詰加工技術を開発したのも雲鷹丸といわれている。いわば蟹工船のはしりである。練習船「海鷹丸Ⅱ世」うみたかまるは戦後復興の象徴ともなった第1次日本南極地域観測隊（1956～57年）に「宗谷」とともに参加した。このとき南極海で採集されたペンギン類や海鳥類、アザラシなどのはく製は、その直後に発効した南極条約によって保護対象となったため、国内では極めて貴重な標本となっている。

魚類標本の展示は必ずしも充実していないものの、やはり日本の水産史を反映している。例えば、展示の約半分はサケ科魚類が占める。言うまでもなく、サケ・マス類は水産上重要なグループであり、長く研究対象となってきた。現在では外来種問題の方が注目されるが、ソウギョ、ハク

レン、ダントウボウといったコイ科淡水魚の展示もある。これらはかつて成長の早い養殖対象種として中国から国内に持ち込まれ、本学でも研究対象とされたと思われる。

もちろん、教育研究史は現在も進行中である。本館でコククジラの骨格標本が展示されているが、この標本はあえて頭部以外は組み立てずに、さながら収蔵庫の中の

ように、バラバラの脊椎骨などを並べるにとどめている「写真」。これは展示標本といえども、いつでも研究に供することができるようにしているためである。

当館の展示テーマは「海へのいざない」とされているが、実際には「日本の水産業・水産



〔写真〕コククジラの骨格標本

教育研究の発展の歴史へのいざない」といった方が実態に即しているかもしれない。

2—震災と戦争を越えて—博物館の歩み

順番が前後するが、当館の歴史は、東京水産大学の前身である農商務省水産講習所に標本室が完成した1902年に始まる。標本室は整備が進みコレクションも充実していったが、1923年の関東大震災によりすべて焼失してしまった。その後、1936年に再建されたものの、1945年の敗戦に伴い東京越中島の校舎は進駐軍に接收され、標本室も閉鎖される。

1947年には水産講習所が横須賀市久里浜の旧軍施設へ移転したが、このとき多数の標本や模型が破損・紛失した。その後、大学の改組を経て1957年に東京水産大学は現在の品川へ移転を完了し、木造1棟を水産博物館として標本類の収蔵を開始した。現在の建物は1971年に完成し、名称も水産資料館と改められた。2016年には耐震改修と増築を行い、マリンスイエンスミュージアムとしてリニューアルオープンし、現在に至る。

先ほど「歴史へのいざない」と標榜したばかりだが、震災や戦争で多くのコレクションを失ったことは誠に残念である。ここで、もう一つ触れておきたいのが練習船「はやぶさ丸」である。はやぶさ丸の前身は、ビキニ環礁近海でアメリカが行った水爆実験で被曝した第五福龍丸である。被曝後は東京水産大学の係船場で検査・除染され、そのまま大学に払い下げられ、10年以上にわたり練習船として活躍した。引退後は廃棄業者に引き渡されたが、保存を求める市民運動を経て東京都の所有となり、現在は「都立第五福龍丸展示館」で展示保存されている。しかし、はやぶさ丸の歴史については本学の学生の多くが知らず、教職員でも認識していない者が少なくない。現在、本学に残されているのは文献資料のみだが、本学の重要な歴史の一部として、悲惨な歴史を繰り返さないためにも、当館でできることはないか模索している。

3 市民とともに育つコレクション

本学の品川キャンパスには、自然科学系のみならず、文系や工学系の分野もあり、展示内容にもその多様性が反映

されている。一方で、歴代館長は、博物館での勤務経験を持つ教員か、生物分類学を専門とする教員が務めてきた経緯があり、そのため収蔵庫の研究用資料の多くは、魚類や無脊椎動物を中心とした生物標本で占められている。

展示用資料については積極的な収集は行っていないものの、一般の方から寄贈の申し出をいただくことは少なくない。代表的な例として、数百点に及ぶ甲殻類のコレクションや、鯨類ほぼ全種を網羅したミニチュアコレクションなどがあり、これらは展示資料として活用している。

そのほか、特に多いのはウミガメ類のはく製の寄贈申し出である。ウミガメ類はすべてワシントン条約附属書Iに掲載され、国際取引が禁止されている。また、種の保存法でも保護が義務付けられている。かつて土産物として海外から持ち込まれた個体が国内に相当数残されており、不要になって処分困った方々から寄贈が申し出られることが多いようである。

しかし現在では、原則として受け入れを行っていない。理由は、産地や採集年といった生物標本として不可欠な情報が欠落している場合が多く、科学的価値がほとんど認められないためである。そのような個体を多数所有す

る意義は見出し難く、加えて、防虫処理など保管には一定のコストも必要となる。すでにタイムイなど複数ののはく製が収蔵庫に保管されているが、これ以上の受け入れは慎重に判断している。

4 学生が学びを体験する場として

本学には学芸員コースが設置されており、博物館実習の一部が当館で行われている。実習生は、オープンキャンパスや大学祭の際に、館内を紹介するパンフレットの作成をするほか、当日は、受付業務、館内の案内、展示のガイドなどを交代で担当する。こういった日は、1日あたり3千人程度の来館者を迎えることもあるが、実習生が主体的に業務を担っている。

また、講義の一部には当館を利用するものもあり、水産経済史や博物館教育論などがその例である。加えて、当館での実習ではないが、ある英語の授業では、学内で撮影した映像に英語のナレーションを付し1本の動画を完成させる課題が課される。その際、多くの学生が当館の展示を題材としている。

このように、海洋に関する多様な資料が一堂に集まる当館が、学生にとって身近な存在となっていることは、大学博物館の重要な存在意義の一つであるといえよう。

5 地域とつながる海の学び

本学は東京都港区と連携協定を締結しており、その一環として港区立郷土歴史館との共同事業「夏休み学習会《見て・さわって・学ぼう》―東京湾 自然と人―」を毎年実施している。この事業は郷土歴史館と当館でそれぞれ1日ずつ行われ、小学生高学年を中心とした参加者は2日間とも参加することが原則となっている。テーマは「東京湾や港区に関わる自然と人」であり、郷土歴史館が文化や歴史を、本学が自然（生物）を担当する。

2025年度のテーマは「海の植物、海そうを知ろう！」であった。郷土歴史館では「大森海苔のふるさと館」から講師を招き、当館では本学の藻類学の教授に講師を依頼した。2日間にわたるプログラムは、文系と理系を融合させた非常に充実した内容であり、私自身も毎回参加者と一緒に楽しんでいる。講師は「見て・さわっ

て」というテーマに沿って実物を準備してくださるため、子どもたちにとって貴重な体験と記憶となるだろう。実物に触れる（実際に触るというだけでなく、本物に接するという意味でも）体験を提供することは、当館のみならず博物館全般に共通する重要な役割の一つである。

このほか、近隣の保育園や幼稚園児、デイサービス施設からの来館も年間で数十件にのぼる。日々の散歩コースの一つとして当館を組み込んでいただいていることは、地域に根差した存在であることを示している。

6—南極から見える地球のつながり

2025年、当館では南極コーナーのリニューアルを行った。これまで明確なコンセプトやタイトルがなかったため、この機会に「南極海からみた地球の生態系」と題し、展示の趣旨を明確化した。

先述のとおり、本学は練習船「海鷹丸」による南極海の観測が続けてきた。当館には、ペンギン類、アザラシなど貴重ではなく製標本が収蔵・展示されてきたが、これまでは解説文もなく、ただ珍しいものを陳列している印象が否め

なかった。さらに、その他の展示は、分類群ごとに専門家が監修するというスタイルを取っていたため、分類群間のつながり、すなわち食物網や生態系を学ぶ視点に欠けていた。

今回のリニューアルでは、かつて南極海で採集された海鳥類のはく製をペンギンやアザラシと同じコーナーに移し、南極海の食物網を解説するパネルを新設した。さらに、南極海で見られる海鳥類や鯨類など、短期間で長距離を移動する動物を取り上げ（一部の海鳥は日本や北極海まで渡りを行う）、彼らの移動を通じて、地球上の局地的な生態系が互いにつながっていることを解説した。来館者には、身近に起こっている環境問題もまた南極海と無関係ではない、という認識を持ち帰っていただけることを、この展示で期待している。

7—世界の来館者にどう伝えるか

インバウンドの増加により、当館でも海外からの来館者が目立って多くなってきた。また、学内には留学生も数多く在籍していることから、展示解説の多言語化は不可欠の課題となっている。先に述べたリニューアルに際

しては、解説に英訳を付すことも試みた。

近年のAIの普及により、英語解説を作成するハードルは低くなった。同時に、来館者が自身のスマートフォンで日本語を読み取り、瞬時に各国の言語に翻訳できるようにもなっている。そのため、多言語化の方法をどう位置づけるかについては慎重な検討を要する。

日本語と英語を併記すれば、解説パネルのスペースは単純に2倍必要となり、その分文字の大きさも縮小せざるを得ない。これは、読みやすさを損なわずに十分な情報を伝えなければならぬ解説作成のジレンマである。また、音声ガイドの導入といった解決策も考えられるが、導入や維持のコストは大きな負担となる。今後、多言語化にどう取り組むかは、当館にとって重要な検討課題である。

8 都会で海を感じる—小さな博物館の大きな役割

当館では、展示や資料収集の方針について、一貫したコンセプトを持たないまま、学内での位置づけも曖昧な状態で運営が続けられてきた。そのため、時代ごとに教員や数年で交代する館長の判断によって、ある意味場当

たりの資料収集や展示が行われてきたように思われる。しかし、その結果として、期せずして水産業や水産研究の歴史をたどることが可能になっていともいえる。

地球は「水の惑星」である。表面の7割を海洋が覆い、その平均水深は3800メートルに達する。広大な空間を形づくる海は、人類にとって今なお畏怖の対象であり、神秘的な領域でもある。実際、テレビ番組やインターネット上には、さまざまな海洋生物や深海の映像が溢れる。博物館では生きた生物や迫力ある映像をそのまま展示することはできないが、来館者は「本物・実物」に直接に触れ、五感で感じ取ることができる。

当館は総合博物館と比べれば規模こそ及ばないが、専門大学のミュージアムとして、都会の真ん中で海を身近に感じられる場である。散歩の途中でも立ち寄れる距離感で、海洋を実感できるという点は、テレビやインターネットからは得がたい体験であろう。気軽に海を感じながら、日本が歩んできた水産業や海洋学の一端に触れる場所—それが当館の存在意義である。

時をこえて響く音

—活用と保全の調和を目指した知の発信—

不動 真優

国立音楽大学楽器学資料館
主任学芸員・課長補佐

はじめに

国立音楽大学が創立100周年を迎える2026年、附属施設である楽器学資料館も展示室を備えてから50周年という節目を迎える。この半世紀、当館は楽器学の研究拠点のひとつとして、社会に知を発信してきた「写真1」。

本学の楽器資料の収集は1966年にさかのぼる。当初は、チェンバロをはじめ、ルネッサンス・バロック時代の楽器を演奏研究のために購入した。翌年には雅楽や能、箏曲などで演奏される邦楽器も加わった。10年後の1976年には所蔵楽器点数が124点となり、展示室を完備。以降も着実に収集を進め、現在の所蔵点数はお



[写真1] 楽器学資料館の展示室

よそ2600点にのぼる。

「音楽研究に必要とされる楽器に関する資料を整える」という方針に基づき、名器や骨董的価値よりも、地域や年代に偏りのない【系統的な収集】を基本とし、世界各地の民族楽器についても幅広く収集することを目標としている。

1 学びを提供する教育的活用

現在、授業で最も教育活用されているのは、チェンバロやクラヴィコード、フォルテピアノなどの鍵盤楽器である「写真2」。これは、現代のピアノと各時代の鍵盤楽器には多くの違いがあり、鍵盤楽器専修の必修授業や、レッスンにおいて、その違いが取り上げられるためである。

例えば、ヨハン・セバスチャン・バッハは、ピアノのための作品を残しておらず、チェンバロやパイプオルガン、クラヴィコードによる演奏を想定して作曲していた。ピアノは弦を打って音を出す、チェンバロは弦をはじいて発音する構造のため、音色はもちろん、強弱や表現に関わるアプローチの仕方にも大きな違いがある。

本学の学生をはじめ、現代の多くの演奏者にとって、たとえバロックや古典派の作品であっても、それを現代のピアノで演奏することが一般的となっており、当時の楽器へ意識が向けられる機会は多くない。

そうした中で、当館が提供する演奏体験は、作曲家が作品を生み出した当時の楽器と、現代のピアノとの違いを感覚的に捉える機会となり、演奏解釈を深めるための一助となっている。

鍵盤楽器以外にも、世界各地の民族が用いる楽器に触れることは、文化の多様性を学び、音楽の世界観を広げることにつながる。そのため当館では、各地域の伝統音楽の演奏をレクチャーコンサートやワークショップを通じて触れる機会を提



【写真2】展示室内のチェンバロエリア

供している。こうしたコンサートは、これまで基本的に入場無料で一般にも公開しており、地域に開かれた活動のひとつとなっている。また、週替わりで楽器を紹介・解説する「楽器の10分講座」を年間を通じて開催し、見学者に学びの場を提供している。

さらに、日本の音楽教育は長らく西洋音楽が中心であり、自国の音楽を学ぶ機会はどうしても限られていたが、現行の中学校の学習指導要領「音楽」では、和楽器を用いた表現活動を行うことが必須となっている。これを受け、本学附属中学校の生徒を対象に、歌舞伎のお囃子や、雅楽の楽器をテーマとした邦楽体験の機会も新たに設けた「写真3」。



〔写真3〕邦楽体験で篠笛に取り組む附属校の中学生

2 保全を考慮したレプリカの活用

「楽器」とは、音を出すため、音楽を奏するため使用されるものと定義されるが、博物館資料となると、保全の観点からその使用を制限せざるを得ない。なぜなら、演奏によって発音に関わる部位の摩耗や劣化が進み、会場等への移動による環境変化や振動によって楽器全体に影響が出ることもある。目的が「演奏」となってしまふと、よりよい音色を得るために素材を交換する必要があるが、当時のような素材や技法が用いられていたかを示す貴重な歴史の痕跡を失ってしまうことにもなるからである。

一方で、音を「聴く」ということは、その楽器の理解に欠かせないことでもあるため、活用と保全のバランスをとることが常に求められる。

そこで当館では、レプリカ（複製）楽器を活用している。可能な限り当時と同じ素材と技法によって製作された楽器は多くのことを学ぶ機会を与えてくれる。

本学100周年を記念して製作したフォルテピアノはその一例であり、本学のシンボルツリーを楽器の一部に用

い、ウィーンの製作家アントン・ワルターによる1795年ごろの楽器を複製したものである。ワルターのピアノはモーツァルトも所有し、ハイドンや、若き日のベートーヴェンも演奏していたといわれる。古典派の音楽を学ぶ上で極めて有意義な資料となった。

同じピアノとは言え、モーツァルトが演奏していた18世紀後半のフォルテピアノと現代のピアノとは、弦の素材、弦の張力、弦を打つハンマーの素材、アクション（打弦に至るからくり）の仕組み、指で押し下げる鍵の深さなどが異なり、その違いは音色、音量、演奏者が感じる鍵盤のタッチにも如実に表れる。

今年度は、この楽器を用いてレクチャーコンサートの様子



[写真4]サマースクールでの公開レッスンの様子

ほか、サマースクールを開催した。サマースクールは、5日間の短い期間ではあるが、フォルテピアノ奏者の平井千絵氏の指導による公開レッスンを本学学部生および院生、そして附属校の中学生・高校生の有志が参加して行った。また最終日には修了演奏会を実施。参加者は、普段演奏している現代のピアノとの違いに戸惑いつつも、徐々にその楽器の特性を学び、各自の表現を追求した「写真4」。こうしたピリオド楽器（各作曲家が生きていた時代の楽器を指す言葉）の学びの機会は、世界的に見ても少ないことが指摘されており、当館では今後もこうした機会を継続・拡充していく方針である。

3 展示室の構成と企画展示および関連イベント

当館の展示室は広さ442㎡のワンフロアである。壁沿いに配置されたウォールケースでは、世界各地の楽器をホルンボステル・ザックス分類に基づき、発音原理で分けて展示している。フロア中央部には鍵盤楽器を配置し、各所に設置したタブレットおよびキャプションによって、名称・地域・年代・分類番号などを確認できるようにし

ている。ただし、さまざまな授業での利用を前提として
いるため、学生自身が調べることを促すよう、各楽器に
対する解説パネルは最小限である。そこで、学芸員によ
る、ガイドツアーと質問応対は常に行い、さまざまな見
学者の要望に可能な限り応えるようにしている。

また展示室の一角を「企画展示コーナー」として、前
期・後期にテーマを設けた展示を実施している。企画内
容は、当館の研究内容を発表する場とするほか、作曲家
や各国の周年に関連づけることもある。こうした周年に
は、関連する演奏家が来日することがあり、その機会を
捉えた演奏依頼が可能となるためである。

2024年は、トルコ共和国と日本との外交関係樹立
100周年を記念して「トルコの楽器 ―オスマン帝国の
時代から続く音楽文化―」という企画展示を行った。ト
ルコ大使館に協力を仰ぎ、トルコの古典音楽演奏団体で
ある「トルコ共和国イズミル国立古典音楽団」の来日に
合わせ、レクチャーコンサートを開催することができた。
ウッドやカーヌーン、ネイといった、日本では耳にする
機会の少ない楽器の演奏と解説は、学生ほか来場者に新
たな知見をもたらすことができた「写真5」。また、トル

コの音楽団からも日
本の音楽について知
りたいと要望があっ
たため、本学の教員
による日本音楽のレ
クチャーを設け、ま
た本学の長唄三味線
の授業の見学も設定
した。双方にとって
お互いの音楽文化を
理解しあう貴重な機
会となった。

4—教育資料の蓄積と学術調査

当館では、数年単位でプロジェクトを立ち上げ、所蔵
資料を用いた取り組みや、学術調査を行っている。

2016年からは、楽器が演奏されている様子や、演
奏家に対するインタビューを動画で記録し、教育用映像



〔写真5〕トルコ共和国イズミル国立古典音楽団によるレクチャーコンサート



[写真6]音響分析調査の様子

の制作を行っている。映像データは授業利用を目的とした教員に貸し出すほか、学内向けにGoogle Classroomや、一部の動画はWebサイトでも公開している。

また2023年からは、館長である三浦雅展によって、19世紀のフォルテピアノの音響分析を行い、各メーカー

の音色的特徴を捉え、相違や類似性を可視化した「写真6」。こうした調査結果は、毎年発行している当館の「活動報告」にまとめ、冊子およびWeb上で公開している。

楽器は木材や皮革、金属など多様な素材から成るため、温湿度変化や虫や菌（カビ）による劣化リスクなど、多角的な視点で環境を整える必要がある。また、保全の面から考えれば、本来の使用目的である演奏も制限せざるを得ない。しかし、その音色の提供は、楽器・音楽を学ぶ上で必要なひとつの要素となる。

当館は、大学博物館として、活用と保全のバランスを常に考えながら、可能な限り学びの機会を広く提供していきたいと考えている。そして今後は、保全上の課題を十分に踏まえた上で、環境変化に強く、修理可能と考えられる楽器を選び、学外でのアウトリーチ活動にも取り組んでいきたい。こうした活動を通じて、当館での教育的取り組みが、本学の魅力の一端として広く伝わり、大学全体の発信力向上にも貢献できるよう努めていきたい。楽器に込められた知と響きを未来へ手渡すために、活用と保全、その両輪をたゆまず回し続けていく所存である。

都心で見学できる

化石の水族館

宮田 真也

学校法人城西大学

水田記念博物館大石化石ギャラリー
学芸員・理学部助教

1—大学ミュージアムの設立背景と運営理念

水田記念博物館大石化石ギャラリー（以下、当ギャラリー）は、地球生命や自然科学への知的探求心を育てるさまざまな教育プログラムを運営するために、学校法人城西大学が設立した一般公開を伴う博物館施設である。大石道夫東京大学名誉教授、および中国遼寧省古生物博物館より寄託・寄贈を受けた、約200点の実物化石標本と学術標本の保管・展示を行っている。そのほか、実物標本を用いたワークショップや展示解説、近隣の学校への出前講座などの教育普及活動、および自然史や博物館

学の研究を行っている「写真」。

2—展示標本の特徴・活用

当ギャラリーでは、大石道夫東京大学名誉教授が約40年かけて収集した大石コレクションが展示の主体となる。本コレクションは、おおむね200点ほどの実物化石からなり、小さなスペースではあるが所狭しと展示されている。化石は主に魚類が多く、そのほか植物や昆虫などがある。これほど多くの魚類化石が展示されている点は他館では類を見ない当ギャラリーの大きな特色であり、いわば「化石の水族館」である。魚類化石は標本自体も繊細であるため、見学者が魚類化石の細かい部分も観察しやすいように、ケースと標本との間を狭くしている。また、一部ではあるが触れることができる展示もある。

これらの標本の中には、国内では当ギャラリーのみで保管や展示されているものも含まれている。そのため、一部の標本は、他館の特別展などへの貸し出しを通じた学術交流にも活用されている。



[写真1] 館内展示室

3 教育との連動

当ギャラリーが設置されている学校法人城西大学東京紀尾井町キャンパスでは、本法人が運営する城西大学および城西国際大学が、共に研究・教育活動を展開しており、大変賑わっている。城西大学は地学系の学科はないものの、理学部が設置されており、中学校、高等学校教諭一種免許（理科）も取得可能である。そのため、当ギャラリーの学芸員が、教職および選択科目の地学系の科目を受け持っている。授業の内容によっては、化石割り体験などを取り入れ、実物標本に触れることの大切さを学生たちに経験してもらう。また、城西国際大学ではメディア学部が設置されている。古生物はキャラクターデザインのモチーフになりやすいため、年に一度の古生物の特別講義を行うほか、当ギャラリー内での取材実習などにも活用されている。

4 研究

当ギャラリーは、国内では他に類例の少ない海外産魚類化石を、体系的に収蔵・展示している点で特筆される。



[写真2] インドネシア産三畳紀シーラカンスの仲間、ワイティアオオイシイ (*Whiteia oishii*) のタイプ標本 (新種を定義するときの基準となる標本)

そのため、これらのコレクションを用いた分類・記載研究が進められている「写真2」。また、国内産魚類化石に関しても、他館や大学の研究者だけでなく、市民研究者とも協力しながら、調査・研究が行われている。そのほか、ワークショップを通じた自然史教育のプログラム開発や、博物館学の研究も、他機関と協力しながら取り組んでいる。

5 社会貢献

当ギャラリーでは、随時、事前予約制で化石割り体験を行っている（教材費1000円・現金のみ。学芸員が対応可能日限定）「写真3」。また、学芸員が在席時に限るが、化石に関する質問や相談、展示についての解説も行っている。そのほか恒例行事として夏休み、冬休み、春休みに親子向けのワークショップを行っている。特に夏休みは低学年と高学年以上に分け、学習内容の異なったプログラムを展開している。ワークショップでは「見て、触って、考える」を重要視し、必ず実物標本を参加者に触ってもらい、図鑑やインターネットだけでは知ることの



[写真3]体験用に用いるオルドビス紀の三葉虫。綺麗に出すのはなかなか難しい

できない自然史標本の面白さを実感してもらおう。これまで、オルドビス紀の三葉虫や、30万年前の木の葉の化石を取り出す体験のほかに、現生や化石のサメの歯に触れるプログラムや、琥珀の選別作業の体験などを行ってきた。また、地域の小学校へ出前講座を行ったり、授業などでの見学の受け入れも行っている。また要望があれば、校外学習の見学場所としても活用していただいている。

6 今後の展望

当ギャラリーで展示されている魚類化石の中には、十分に研究されていない種類のものも含まれている。そのため、海外の研究者とも協力して共同研究を進め、大石コレクションの学術的価値をより高めていくことが望まれる。さらに、化石の研究、展示、普及活動を通じて、来館者の皆様に自然史の楽しさや面白さ、自然の身近さを感じていただき、古生物学や地質学を中心に、その面白さや大切さを次世代に伝承していきたい。

創立100周年を迎える 演劇博物館の活動

児玉 竜一

早稲田大学文学部教授・
演劇博物館長

早稲田大学演劇博物館は、1928年に創立された。

坪内逍遙の古稀と、翻訳『シェイクスピア全集』全40巻の完成を記念して建てられたものである。逍遙が博物館構想を持ったのは、大正5（1916）年ごろのこととされ、併せて演劇資料を総合した大展覧会を計画している中で遭遇したのが、大正12（1923）年9月1日の関東大震災だった。逍遙の自邸は無事であったが、俳優や作者の家に伝来していた都内の演劇資料は甚大な被害をこうむった。これによって、個々人が重要な資料を私蔵しているのには限界があるとの持論をますます強め、資料を集約して管理する施設としての博物館の必要性を痛感することになったという。

当時、早稲田大学は大隈講堂建設のための募金活動を展開中で、それと重なる形での募金活動は憚られるところもあったため、別に演劇博物館設立委員会を立てて、発起人として渋沢栄一を迎えて政財界に働きかけるとともに、逍遙自身は、『逍遙選集』の印税をすべて大学に積み立てる形で博物館建設に充てた。建設予定地も、逍遙自邸の余丁町（現在の新宿区余丁町）か、あるいは上野か日比谷かと、いくつかの候補があったが、大学構内の西北隅と決定した。都の西北の西北というわけである。

建築様式については、逍遙の腹案に従って、シェイクスピア時代のロンドンのフォーチュン座を模した建物として、今井兼次ほか設計にあたった。シェイクスピアの本拠地としてはグローブ座が有名であるが、1920年代当時、グローブ座の形状に関する正確な知見は乏しかった。その点、フォーチュン座は土地の売買契約書類が残っており、それに基づく復元図面の研究が海外ではすでに提出されていた。想像に頼るグローブ座より、資料で正確に押さえられるフォーチュン座を選んだということになる。その代わり、グローブ座に掲げられていたラテン語の「Totus mundus agit histrionem」（世界は

すべて劇場なり」を模様として付けた。建物の骨格を半ば外壁に出す形のハーフティンバーの様式で、その線もやや斜めとなるところもあるのは、却って当時の英国風に近いとのことである。

シェイクスピア時代の劇場を模した建物は、世界にくつか現存している。最も有名となったのは、ロンドンのグローブ座跡地の近くに復元された「シェイクスピア・グローブ座」であるが、同座の復元が1997年であることを思うと、それよりも70年近く前に極東日本の地にフォーチュン座の原寸大復元を建てた逍遙の構想が、いかに先見の明があったかを示している。しかも、この建物は、それ自体がひとつの博物資料であるのみならず、劇場としても利用可能で、1947年に前進座が「ヴェニスの商人」を演じて以来、たびたび舞台上演に用いられている。つい先頃も、9月26日にシェイクスピアシアターによって「ロミオとジュリエット」が上演されたが、名高いバルコニーのシーンでは、2階の窓を開放してジュリエットの居室として用いることで、初演当時の空間利用の面影をしのぶことができた。

演劇博物館の収集方針もまた、開会式において坪内逍

遙が宣言している。すなわち、ひとつの国、ひとつの時代に偏ることなく、「古今に東西南北にわたったものでありたい」という念願である。従って、日本だけではなく、江戸時代だけではなく、日本演劇も西洋演劇もアジア演劇も、「演劇」と名がついて関連するものならば、すべてが収集対象ということになる。関連する、ということはどう見るかにもよるが、100年近い歩みの中では、必然的に映画やテレビなども「関連」してくるので、現在では、映画関係資料、テレビ関係資料も、その収集対象に含めている。

自国の演劇に関する博物館、ということなら、世界にいくつもの例を挙げることができる。また、ある時代、あるジャンルに特化した収集ということならば、これはいくつもの例を挙げることができる。だが、古今にわたり、東西南北にわたるといって、総合的な博物館をめざす演劇の資料館は、国際的にも数少ないと思われる。かつて、ロンドンのコヴェントガーデンに演劇博物館があったが、現在では撤退してしまっており、収蔵品はヴィクトリア・アンド・アルバート博物館に移管されて、演劇コーナーとなっている。ニューヨークにはブロードウェ

イを始めとするアメリカ演劇資料の総合的な宝庫である、ニューヨーク公立図書館パフォーミング・アーツ館が、リンカーンセンターにある。両館とて、古今東西といえるかどうか知らないが、総合性をめざしている点は紛れもない。そこで、演劇博物館は「アジアで唯一の演劇の総合博物館」と唱えている次第である。

演劇博物館の収蔵品については、創立当初から、演劇界各方面からのご寄贈によるものと、予算内で年度ごとに購求し続けているものとから成っている。古今にわたり、東西南北にわたるとはいえ、地理的な条件からも、また坪内逍遙の専門分野からも、歌舞伎や文楽、近代劇に関する資料が最も多く、とりわけ役者絵、歌舞伎台本、歌舞伎番付、役者評判記、人形浄瑠璃の丸本などでは、世界一の収蔵数を誇っている。

演劇に関連する収蔵品の特色は、その形状、形態がきわめて多岐にわたるといふ点にあり、衣裳、小道具、鬘かづりなど、保存と管理の方法がそれぞれ個別に専門性を有している。もちろん、それに加えて、図書資料、美術品に相当する資料、写真資料、映像、音声資料などが、数多くある。資料総数は、数え方にもよるが100万件を超

えている。

物理的に最大のものは、先述した博物館の建物そのものであるが、それに次ぐのが1880年に東京・新富座で引幕として使用された、河鍋晩斎かわなべ きようさい肉筆による「新富座妖怪引幕」で、横17メートル、縦4メートルという巨大なものである。2019年にロンドンの大英博物館で開催されて話題をよんだ「The City exhibition Mangaマンガ」において、最重要出品のひとつとして扱われ、多くの注目を浴びた。

図書の収蔵については、貴重書として閲覧申請を受け付けているもののほかに、博物館本館において閲覧していただいている一般図書・雑誌がある。これも、日本語で書かれた演劇書の収蔵、および日本の演劇雑誌の収蔵についても日本一である。利用資格は、まったく不問で、身分証明書に類するものさえあれば、どなたでもご利用いただくことができる。その点では、早稲田大学内にあって、中央図書館や学部図書館以上に、最も広く一般に開かれた場として機能している。

社会一般への働きかけとしては、春秋2回の特別展・企画展を開催し、図録や関連書籍を編集・刊行してい

る。また、展示にともなう演劇講座に各界のゲストをお招きして、一般観客を無料で入れたイベントを行っている。2024年度開催の展覧会「築地小劇場100年」では、新劇の主要3劇団、文学座、俳優座、劇団民藝からそれぞれトップ俳優にお越しをいただき、演劇評論家大笹吉雄氏と館長とで劇団ごとに座談会を開催、それぞれ会場が満員となる盛況を得た。また、文部科学省から共同利用・共同研究拠点として認定をうけた「演劇映像学連携研究拠点」を研究活動の場として、広く学界全体に研究チームをつのり、公募研究によって館蔵資料を活用した調査研究と目録化・公開を推進している。ここでも、また、連携研究拠点の主催事業として、無声映画上映や、Zoomを利用したイギリスの研究者との研究的対談の実施・公開など、さまざまな事業を展開している。

資料のデジタル公開については、極めて早くから取り組んでおり、2000年前後から資料公開を始めている。館蔵の役者絵、約48000点を全点ネット上で公開したのが2001年で、後発の大英博物館、ボストン美術館等のアーカイブとともに、国際的な浮世絵研究の環境を変えたものと自負している。演劇博物館ホームページ

(<https://enpaku.w.waseda.jp/>)上で公開しているデジタルアーカイブは49件に及んでおり、早稲田大学の文化資源データベースのアクセスの96パーセントが、演劇博物館のものである。中でもとりわけ世界中からのアクセスが集中しているのは、「浮世絵データベース」となっている。2023年からはJDTA (Japan Digital Theatre Archives) を公開しており、コロナ禍での緊急舞台芸術アーカイブ+デジタルシアター化支援事業 (EPAD) の一環として収集された、舞台公演映像や戯曲の情報を検索・閲覧することができるとのこと。本年2025年度からは、国文学研究資料館との提携によって、貴重書約730点を画像公開しており、今後もデジタル化による資料公開は、一層の進展をはかってゆく予定である。

〈参考〉

早稲田大学演劇博物館



小さくても

きらりと光るミュージアム

—学習院の歴史と知の集積を
未来に伝える—

長佐古 美奈子

霞会館記念学習院ミュージアム、
学習院大学史料館学芸員

はじめに

2025年3月、「学習院の歴史と知の集積を未来に伝えるミュージアム」をコンセプトとした霞会館記念学習院ミュージアム（以下、学習院ミュージアム）がリニューアルオープンした。

学習院ミュージアムは学習院大学史料館（以下、史料館）がその基となっている（現在も大学組織名称としては史料館である）。史料館は1975年に大学附置研究施設として開設され、学習院の来歴に基づき、学習院関

係と皇室・皇族・

華族に関する史資

料・美術作品など

を収集保管・調査

研究・展示公開し

てきた。1985

年には博物館相当

施設に認定され、

学芸員資格取得事

務も兼務している。

史料館の収蔵史

資料・美術作品は

この50年で約25万

点にのぼり、収蔵庫・展示室共に刷新が喫緊の課題であつ

た。この度、大学図書館の移転に伴い、旧大学図書館の

建物—1963年にモダニズム建築の巨匠、前川國男に

より設計・建築—を再活用する方針で新たに整備するこ

とになった。

博物館相当施設である当館の改修にあたっては、史資料・美術作品が適切な環境で収蔵され、長く保全できる



霞会館記念学習院ミュージアム 外観

が必要になる。幸いにも一般社団法人霞会館から助成もいただき、重要文化財も展示できるスペックの施設に生まれ変わった。また学芸員課程履修の学生たちが使用する畳敷きの実習室や模擬展示のできる展示ケースも備え、学生たちの学習環境が充実した施設となった。

1 常設展示室 「学習院の豊かな学び」

1877年に華族会館（一般社団法人霞会館の前身）に

より華族子女のための学校として開校した学習院には「日本で初めて」と言われる教育やそれに関わるものが数多くある。制服やランドセル、馬術教育、東洋史、また直観教授※、海外修学旅行なども恐らく日本で初めてである。常設展示室ではこ



常設展示室

のような学習院の豊かな教育の歴史を、これまで史料館が収集した実際の史料・標本や画像を用い展示している。常設展示室は66㎡と手狭であるため、詳細な説明が必要な部分に関しては壁を取り巻く年表内に二次元コードを表示し、そこから読み取れるよう工夫した。この二次元コード方式であれば今後さらに説明項目の追加や、多言語対応などが必要になった場合にも、簡便かつ安価で迅速な対応が可能となる。

2 リニューアルオープン記念展 「学習院コレクション 華族文化 美の玉手箱 ―芸術と伝統文化のパトロネージュ―」

特別展示室で開催されたリニューアルオープン記念展「学習院コレクション 華族文化 美の玉手箱―芸術と伝統文化のパトロネージュ」は3月14日より5月17日までの会期で、1万5000人以上の方の来場を得た。

前述のように当館には天皇家をはじめ、皇族、華族の学び舎であった学習院ゆかりの史資料・美術作品など約25万点が収蔵されており、今回はそのコレクションの中

から、芸術と伝統文化のパトロネージュをテーマに絵画、工芸品、古文書、文学資料など約100件を展示した。

古来より、芸術の創作と発展には王侯貴族らをはじめ、



特別展示室

「学習院コレクション 華族文化 美の玉手箱—芸術と伝統文化のパトロネージュ」展

それぞれの時代に活躍をした人々が重要な役割を担ってきた。豊富な知識と高い美意識を持った彼らは、優れた芸術作品を収集し、才気溢れる芸術家を見出して、その能力が発揮できるよう惜しみなく援助した。芸術の発展は、彼らによる芸術作品の保護と、芸術家への支援—パトロネージュなしには語れない。わが国もまた、天皇家をはじめとする多くのパトロンにより、独自の文化や芸術が育まれ、これまで連綿と受け継がれてきた。彼らは伝統儀礼を重んじつつ、日常生活においては歌や文学、書画といった芸術を好み、優れた芸術作品の誕生に大いに貢献した。わが国の芸術、伝統文化も天皇家をはじめ、国家を支えた人々などのパトロネージュにより発展を遂げてきたのである。

パトロネージュの一つとして工芸職人への庇護がある。明治維新ののち、江戸時代の工芸職人らの才能と技術を守りそれを後世へと伝えるため、天皇家をはじめ宮家の人々は、彼らへ製品制作を積極的に依頼した。完成品は天皇家から宮家へ、宮家から華族家へと下賜され、また華族家でもそれに倣った品が数多く作られた。そのような展示品の中でも当館のメインコレクションである「ボン

「ボンニエール」は特に人気を集めた。

ボンボニエールとは皇室・華族家などの慶事の際に配られる掌にのるほどの小さな菓子器である。菓子器なので中には菓子――主に金平糖――が入れる。ボンボニエールという名

が示す通り西洋由来の慣習が、明治中期の日本皇室にもたらされた。皇室では明治維新で職を失った刀剣職人や金工職人などにボンボニエールの制作を依頼し、菓子器を美術工芸品の域に高め、かつ彼らの職と技術を守った。ボンボニエールは宮中晩餐会などの際に外国賓客へ配られ、日本の工芸技術を外国へPRする役目も担った。

現在でも御即位や成年式などの皇室の慶事の際に、金平糖入りのボンボニエールが下賜されている。



八稜鏡形鳳凰文ボンボニエール
大正大礼 1915年11月10日

3 霞会館記念学習院ミュージアム これからの展望

学習院大学で学芸員資格を取得した学芸員は日本全国の博物館に勤務しており、全学芸員に占める学習院大学卒業生の割合は、実は非常に高い。今後は、その卒業生達が勤務する博物館・美術館や、各地の旧華族家関係の博物館・美術館などと連携し、展覧会を開催していきたいと考えている。そのためには25万点にのぼる収蔵史料・美術作品のデータベース化が喫緊の課題となる。幸いデータベース構築・公開に向けた中長期計画推進予算が大学内で採択され、数年後のデータベース公開を目指して現在鋭意奮闘中である。

一方、学習院ミュージアムの来観者は一般の方がその多くを占めており、教職員や学生の来観者が少ない。今後は教職員・在学生や卒業生、さらにはこれから学習院への入学を目指す方々にも親しまれる「小さくてもきらりと光るミュージアム」にしていきたい。

※直観教授…具体的な実物やものごとの現象を生徒に直接示し、触れることによって理解や体験を得られるような指導を行うこと。